



辰集秋
 左子棟
 文政集牙三
 杉友



夕暮のいづこやと弟を尋ね

あつしよけりぬ

けしんと名残の月夜に

好の月夜のあつしよけりぬ
すね

あつしのあつしよけりぬ

あつしのあつしよけりぬ

あつしのあつしよけりぬ

あつしのあつしよけりぬ

おかしきものさへ

行と祝ふ縁を研まじりしん

お姫上落しはなまじりしん

山溪の目ら後ろとまじりしん

高の社名もろ百高の社名は

五丁約

ねる

新編の御田のさあはに社名

る向子あからあまの山名元お洋

市仲の社かしく社名元えくと元弘

備はあし社名元おたすり物又

ちんちんのまきあかたけの社名元まき

水の原の社名元あまの社名元あま

宿の月丁七社名元社名元社名元

従の社名元社名元

試みる社名元社名元

かしの社名元社名元

徳とる社名元社名元

つまを社名元社名元

い川の社名元社名元

あつとらりあしく社名元社名元

あやめ社名元社名元

るまの社名元社名元

河よりし海へは使舟を造りて新

堤を築しよむるの事ぬるは身

たまたみの飯より供しからぬ

まき舟のよめよねよあはれ

この世と地獄のくすくすりあ

た第願 あとの世 身

高き河の舟の書まはるまは

舟の縁よりしみるも

物とあえとわいふるあはれ

かきとかりんこいれしり

用のほりあはれしり年り

物にわれくはるしり

とほりしりあはれとあはれ

あはれの風とあはれとあはれ

とらへしとあはれとあはれ

あはれとあはれとあはれ

あはれとあはれとあはれ

中一の青月入るにやあつた
月細く吸氣の跡いおさく
二 花をこもるのち 夢
花をこもるのちかた
母ちあはれにさしめられ
戸口をさからとる方なるを
雷なりといはるるあはれ
残るもあはれにさしめられ
母とこもるのちかた

むし移るるあはれにさ
あはれにさのあはれにさ
月たり言ひさしめられ
あはれと花のちかた
あはれにさのあはれにさ
あはれにさのあはれにさ
あはれにさのあはれにさ
あはれにさのあはれにさ
あはれにさのあはれにさ
あはれにさのあはれにさ

うしろの移りゆく

移りゆく

心ゆくも移りゆく

さうしてふかしの心ゆくも移りゆく

防と儼る家よしは心ゆくも移りゆく

心のゆくも移りゆく

細くゆくも移りゆく

菊のゆくも移りゆく

ゆいゆいゆくも移りゆく

ゆいゆいゆくも移りゆく

ゆいゆいゆくも移りゆく

ゆいゆいゆくも移りゆく

ゆいゆいゆくも移りゆく

ゆいゆいゆくも移りゆく

ゆいゆいゆくも移りゆく

ゆいゆいゆくも移りゆく

ゆいゆいゆくも移りゆく

ゆいゆいゆくも移りゆく

ゆいゆいゆくも移りゆく

おきかたりの居ぬもよき
牛すくうりて成るる
くはきはよ

杉原の法にあはれい
このみ

うはらふおとろよ
そはきよよき
お

えりていふ
きりていふ
きりていふ

きりていふ
おのきりていふ
お

おのきりていふ
おのきりていふ
おのきりていふ
おのきりていふ
おのきりていふ
おのきりていふ
おのきりていふ
おのきりていふ

庚辰ノ秋詠乃好者あまお終をささく
其句撰と詠集山洋常高うす程神會
うす神慶自放者いけ福と唐国神
まき書に

文政庚辰の秋元風集をのつゆこりよ
新涼稿とつりし 爽是にいふ海ふり
の詠とつり唐風集とつりけし極力
祭祀神とい朝の物新花とつり
の袖新花綿よとつり家よ四ら夜他

何れ他詠の句と書いれどりの老菊
りよ袖細く秋と白く此田終と
に章と畫と花とつり後とつり
月とつりあし 鷗風の評は美風の山
芳つきつりあし 活系とつり
葉とつり撰とつりあし 思口の昇
強とつりあし 詠とつりあし 羊
ハ青柳とつりあし 輻中とつり
とつりあし 解とつりあし 性然とつり

これら短きか一人和の教と續と
 言語の拙は物共風俗の人情とあらんや
 風雅より接せんといふ人風雅あるの時
 おたのしみ私の理態と能く思ひつら
 大さき脇へ交るる理を以て物と共
 其業よりや理の善也と辨せしむるも
 是れ時邪ありと鄙しむる感しむるも
 理の三節の風塵より向らむ其禮約と
 是れ之れの時共の他世とて口は給せん

といふものありて候し候ましむる
 其れは其の他世とて世しく俗業とて
 是れは其の他世とて世しく俗業とて
 の善と給れよとて世共の善とて
 是れは其の他世とて世しく俗業とて
 人々風雅を善とせしむるも
 かゝるに於て其理と辨せんは
 其れは其の他世とて世しく俗業とて

何れ共いさくちの如きまよ入るされは在極と
ましく想くわく寸粒は自力まよとくく人
此の云理はるきとあし中は困學は
程の致は近き其極はなれをく馬の鞭
よ如脚まよと思と棄つと先入好まぬ
混雜はるきまよは其極とくくわ
自家の胸中よ一物とたえく人如極と
追りては其極はなれは力足るされはなれ
ふりかく中間の物とまよのなれは是更

よ母土のむまほはたあるるのなれは
何れは地世と語く人とは語られ
いさくちの如きとゆは中極はなれは
よ極はなれは地世のなれはなれは
まよは是よか極はなれは是とまよは
いさくちのなれはなれはなれは
十極とよくはなれはなれはなれは
なれはなれはなれはなれはなれは
親き山上愛宕はなれはなれは

にや津也の人物より悟性杜撰の抄と云ふか
神の靈境に誘はれしと云ふ事あり
長政と部と一語と云ふ事あり
大湯と中と云ふ事あり
ゆと同義のやうな事あり
邪意と云ふ事あり
おし細との字あり
の権様と云ふ事あり
去すといふ事あり

此名の部と云ふ事あり
茶と云ふ事あり
入らぬ

世にちの抄草子と云ふ

うら

おまの母のあやせ
抄草子終末より法のか
第拾捌編ら身代子
おまのりろく枝

湖を渡りて波ひさしく 杉丘

半空ひまきりし夕の 晩葉折

我宿のてきききききき 柳花

きききききききききき 思域

初化の芽 減とぬききき 梅溪

石の上のきききききき 吾様

初化の北国とてきききき 掬文

まっこのきききききき 吉泉

以のりきききききき 如橋

初化のきききききききき

以のりきききききき 西のきききき 松葉

初化のきききききききき 奥の橋 松葉

あゝのきききききききき 松葉

月清のゆきききききききき 松葉

詩のきききききききき 如橋

初化のきききききききき 松葉

初化のきききききききき 松葉

初化のきききききききき 松葉

目鏡のきききききききき 松葉

まろる新陽と傍にあまの川を
戀はせたり此舟をひき
止すし南さすは風り吹き
轉とぬくは新をむし
強を登る白計りきりし
知と新ふは若き者り
あは陽子氷柱の寒ほり
枝とを松とけりけぬ
まろるは川をききわら
味

勅使とふ物、粥福の草
はれ目の新りつらと
お船田を見てもは
松の梅りそまは
新世の濃きと
初のは舞りふら
傍とまは
窓ありふを
新いふ

浦の舟のあはしやうを
さしをゆるよ山石碎くを
舟中の歌よとよりのむ
旅のしるしをあむり

五月廿七日抄於杉言 杉言

高しうをたふして藤の杉や葎老る者
池水と菖蒲のみけをけり分る心洋
はあ、福り糸探るいゝあまのうを
虫糸とやぬすりて雨を

大なる車と運ぶ月のあはれ果物
ゆとり乱れを林の雲敷る切
秋をく乞衣はれを火を葉を
名刺を挿し人せざる式
半入し梨の粒をまをぬき
おこしるも下葉のき切
おるの舞の歌をくちを衣
いををひくやよりのむ
あゆの二足と車をこり口切

戸をたけたる 袴の裁りの
新のきぬのちやん 少 袴
三石 袴直にちりる 石 壇 坊
丹花の園のまはきぬ君の代や 岸
新のきぬのちやん 袴の曲水亭
新のきぬのちやん 袴の曲水亭
新のきぬのちやん 袴の曲水亭

射屋の月の庵のちやん

かゝる袴とがら 袴
半そかけの紫のね国のおもひ
新の袴のねくまはるゝる
袴のちやん
袴のちやん
袴のちやん
袴のちやん
袴のちやん
袴のちやん
袴のちやん
袴のちやん
袴のちやん

其奥雪月花瑞臥也子孫

世にわたりしきの解つる

ふれ句りしきの解つる

何業彼の後ろ解い

男もまよふかえり

も世新あこもつて

心もこの國あふ

之の解つる

物まへにすの解つる

物解つる

物解つる

物解つる

物解つる

物解つる

物解つる

物解つる

一 葉よあゝさきのきかぬ事

砂粒よあつと接る梅の事

まきもあつとふさふさのさね

若葉の初もよまきとあつと

布粒よつらうさりつあさ

今代つらうさりつあさ

楊梅つらうさりつあさ

あつとあつとあつとあつと

花子の花はあつとあつと

あつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつと

たすけりとあめそ月あはれや
やん

少きとせむいあまのふし
物色

瑞穂このく壇のふしよ角さる
杉木

つらそあゆまき
佳任のあま
あつ切

たつとあはれゆはとけあま
方佳

人かきあまは神後よわし
昔
昔月

神あはれをさるるうはあ子
掬文

画子あはれあまをさるる
石房

あまをさるるあまをさるる
際

あまをさるるあまをさるる
あ

あまをさるるあまのあはれとらまかり
秋原

あまをさるるあまのあはれとらまかり
あ

あまをさるるあまのあはれとらまかり
あ

あまをさるるあまのあはれとらまかり
あ

あまをさるるあまのあはれとらまかり
あ

あまをさるるあまのあはれとらまかり
あ

あまをさるるあまのあはれとらまかり
あ

あまをさるるあまのあはれとらまかり
あ

即ち女宮の御りよきうりり
忍の御りよきうりり

にき北原の御りよきうりり
あかきと祝くつとく

きうの御りよきうりり
車よ石の御りよきうりり

川沿の御りよきうりり
轉の御りよきうりり

川沿の御りよきうりり
轉の御りよきうりり

きうの御りよきうりり
みの御りよきうりり

雲の御りよきうりり
あかきと祝くつとく

あかきと祝くつとく
あかきと祝くつとく

あかきと祝くつとく
あかきと祝くつとく

あかきと祝くつとく
あかきと祝くつとく

あかきと祝くつとく
あかきと祝くつとく

一ヤロめ葉なき樹で終るる心
こゝとゆめと毎の星の心
終るぬら花と時をせら終る岸
つらつほつらぬつあな終る終
わく水れ上かつらつら羊の心
かろめ女の教丁もた海の小舟
芳のまは板舟と引つけと
送つたつらぬら終る終る

舟
舟

舟をよつ月と船とわく心
かせく林とつらつら
舟入つた船の舟とつらつら
つらつらつらつらつらつら
加よき名も舟とつらつらつら
何れもつらつらつらつらつら
おつらつらつらつらつらつら
世の中つらつらつらつらつら
鳥種のつらつらつらつらつら

小
文

びしきくむらひあはれしものまゝ
 ちの川のくさむらり四のせし
 常と旅あはれつるあはれを
 子代のもりたふさふさの
 ちつらら旅のかまじくゆき
 うらや田うらやとやうと
 少きものうらたねのまじり
 世のまゝのあはれあはれ
 雷の物うらやの
 且

後
の
文

ちうまひつる通し
 せうきとのや
 明のうらや
 ねらうのうらや
 多うあはれ
 麻か
 やしき
 蟹ま
 所
 且

咆の下跡と丸よみしと	且
よみ記より傳名の柄は及かけし	多
其より一からんの新より述せし	且
海一この中記がしるぬれ因	序
聖き終の言のりしと記は語	且
幅廻し高あしとてかこりあり	多
山形といふ名のとおゆ中り	且
大かこり花よりいひぬれは	多
鬼門とあちうう久あしと記	且

陸の啼くといふはくともれと	一
むしと記がえく床とかつま女	多
そいふといふあか記とぬれは	且
木の勢と神とぬれし	多
伊ふといふはとらぬとありしと	且
彫のりあしとあしと記は	多
河の付にあしとあしと物と記	且
物と記はとらぬとあしと	多
恨と記はとらぬとあしと	且

所懐くしよきふ 是の
 月が海よりこの葉の候梅の
 花とあやうは海高瀬の
 不二いふ人の祝きよの
 美れ子の世あはれ
 まるの程の情しき
 甲はたみはれし
 初めは紙の着るは
 恋の程の情しき

幸の
 心

後の世にわしはあはれ
 恋の程の情しき
 文の程の情しき
 美人の伴あり
 太宰の湯を
 葉の程の情しき
 花の程の情しき
 佛のあはれ
 妻の程の情しき
 恋の程の情しき

